

富來先生のご逝去の報は、余りにも突然なことで俄かには信じられなかった。新緑のころにでも先生の傘寿と出版のお祝い、と思っていただけに衝撃は大きく、しばらくは虚脱状態にあった。

先生の研究室の門を叩いてから五十年近くになる。この間、学問はもとより教育から社会生活、家庭生活に至るまで、何かとご教示をいただいた。ともすれば安易につきこうとする私を引き立て、励ましていただいたことがつい昨日のように思える。私が今日あるのは、先生の暖かく慈愛溢れるご薫陶以外の何ものでもない。

初めてお仕事をいただいたのは、大分大学教育学部が大野川流域の総合研究に取り組んだときである。「少し手伝ってくれ」と言われたので、調査の手伝いや車の運転ぐらいなら、と思って引き受けた。後で論文を出すように言われ、お断りすることもできず、大変困ったことになった。幸い卒論で大野川流域の社会構造を調べていたので、どうにかまとめて提出したが、それが先生との連名の論文となり、身の縮む思いをしたものである。

大分合同新聞社の『大分の歴史』のときも、手伝いのつもりが分担させられることになった。ようやく書き上げた原稿を見ていただくと、真っ赤に朱が入って返ってきた。原文がほとんど見当たらないほどである。

「字を書くことは、恥を書くことである」「グラフ・図表をつくれ」「文は短く、簡潔に」等々。幾度言われたことだろうか。文の書き方について、厳しく懇切丁寧に教えられた。今でも拙文を書くとき、「先生はどう言われるだろうか」、とあの時のが臉に浮かんでくる。

思い出はつきない。家族ぐるみのおつきあいもいただいた。先生の亡きあと、私の定年後の再就職先まで心配されておられたと聞き、涙を禁じえなかった。こんなにも不肖の教え子のことを、いつまでも思ってくださいる師がほかにいるだろうか。そんな先生のご恩の万分の一にも報いられなかった非才さが悔いられてならない。

先生どうか安らかに眠りください。ご冥福をお祈りします。